

田中康夫の



136

永遠の変革者こそ「保守」

「人々の革命への要求を先取りするような、その結果、人々が革命など必要としなくなるような賢明な政治や経済の果実を齎す者こそ、真つ当な保守の指導者」。

アントワネットの断首よりも前。彼が68歳で死去したのは1797年。ナポレオン・ボナパルトが総裁政府 *Directoire* に代わって執政政府 *Consulat* を設立する1799年「ブリュメール18日クー・デ・タ」の遙か前に透徹した洞察を示していたのです。

光文社「古典新訳」文庫版で翻訳を担当の二木麻里氏は看破しています。バークの主張から汲み取れる「保守主義」は「壊さないこと」「いま在るものをよく活かすこと」。壊さず保全し、破壊を避ける営為こそ「暴動と流血の革命を回避せよ」の主張に繋がると。今は亡き西部邁氏と僕は15年前にTBSラジオ「BATTLE TALK RADIOアクセス」で「真の保守とは何かいま政治リーダーに求めるもの」を語っています。

「フランス革命なんて糞食らえ」とバークは断じたと早とちりして礼賛の向きも拒絶の向きも、既に潰えつつある「左右」「上下」の二元論的観念形態から脱却し得ぬ浅薄な認識。皆が拍手喝采したフランス革命後にリバウンドの混乱が訪れたのを踏まえ、保守つてのは「何も変えないこと」ではなく

「より良い社会にしていくながら絶え間なく変革し続ける洞察力や気概や行動力を持ち合わせた人物であるべき」と僕は語ります。

「彼の思想は近代知識人に対する痛烈な批判なんです」と応じた西部氏は *De = 予め + scition* 「規定する」処方箋 *Prescription*」を引き合いに、バーク哲学の要諦「Reform to Conserve 保守する為の改革」は人間が考える為には先ずは大前提が必要で、それは何千年という歴史の中から例えば「家族」とか「村」とか「共同体」な有り様を大事だと共有せねば始まらないと続けます。

政治家でありながら宗教論も芸術論も哲学論も一角の著述家だった彼の元へ欧州の「まあまあの人たち」は戻っていくのに、自身のお粗末なオツムや経験から揺るがぬ大前提が出て来ると思い込む日本の政治学だのメディアだのは、バークを脚注扱いだ。

投資の効率性や利益率ばかりが重視され、金儲けになる外国人は歓迎だが、金が掛かる外国人は不要と囁く「経済的新自由主義」の本音が露わになった現在、自治体の赤字事業中止で公共サーヴィ

ス低下、民間委託で逆に大幅値上げを被った市民は被害感情の捌け口を「異質なもの」に振り向ける、とバルカン近現代史研究の佐原徹哉氏が近著『極右インターナショナルリズムの時代』で述べる大意に同意した上で、僕は考えます。

「一時の熱狂」が「恐怖政治」や「独裁政治」を齎す歴史の悲喜劇と前述の「保守の公理」を踏まえ、るなら猶の事、NYTに象徴される米欧日の「伝統的」媒体と知識層は「極右」なる符牒を安易に用いて思考停止報道を続ける前に、風船ガム状態な日本で勃興の新興勢力とは異なり、オルバーン・ウィクトルやジョルジャ・メローニが広範な支持を得て政権を担当し続ける理由を、墨守でなく修正を唱えたバークに立ち返って反芻すべきではないかと。

露中印をドナルド・トランプの米国が追い掛ける地政学的構図の変化を理解し得ず、ウルズラ・フオン・デア・ライエン委員長と共に周回遅れな盲目的主戦論を「ウクライナ」に関して唱和する「近代知識人」フリードリッヒ・メルツやキア・スターマーの国内に於ける混迷を振り返る迄もなく。

★次号11月号の発行日は10月13日(金)です。